

世田谷と地方を繋げた地域ブランド価値の構築

鎌田 真悟

Building Regional Brand Value by Linking Setagaya Ward with Countryside Regions

Shingo Kamada

- 社会にいいこと、地域にいいこと、人にいいこと
- お互いが持つ価値の交換
- 恵那栗と世田谷農産物と JA の融合
- 職人、昭和女子大、世田谷（区）市民、恵那の連携
- 恵那を調べ、世田谷を調べ、学生が発見
- 繋ぐ人（昭和女子大学生）繋ぎ場（文化祭、恵那川上屋・玉川）
- 地方創生に世田谷がお手伝い（観光、食材、融合ブランド共有）
- 継続し世田谷ブランドの理念やプラットフォームを決めていく
- 世田谷栗の構築

■活動メンバー

昭和女子大学生【高木俊雄准教授、小柳かおり、佐藤百華、佐藤百優、関山カエ】
明治大学生【岡田天太、奥山翼、小松知也、沼田佳莞、平澤和樹、堀江剡丞、依田太一】
恵那市【鎌田真悟、鎌田彩華、恵那市、NPO 法人えなここ、小坂潤治、園原麻友実】
世田谷区【JA 世田谷目黒、生産農家（かぼちゃ、小松菜、栗）】

■開発商品

小松菜のケーキサレ、栗のタルト、かぼちゃんどん（南瓜を使った二種類の饅頭）、
南瓜のチーズタルト。

■販売場所

明治大学学園祭（11 月 2 日から 4 日）
昭和女子大学学園祭（11 月 11 日、12 日）
二子玉川ライズ恵那川上屋

■2017 年活動スケジュール

5 月 11 日（木）13:00 方向性の確認（世田谷区産業振興公社・高山博様含む）
5 月 24 日（水）13:30 方向性の決定

7 月 19 日（水）12:15 方針の共有とアイデア会議
8 月 1 日（火）11:00 恵那市長訪問
9 月 13 日（水）16:00 発注数量の予測
9 月 19 日（月）15:00 JA 世田谷目黒打合せ
9 月 26 日（火）NPO 法人えなここでの試食会、恵那市訪問、新聞発表
9 月 27 日（水）6 次化体験と恵那散策（農業、加工、製品）
11 月 2 日（木）～4 日（土）明治大学学園祭での販売
11 月 11 日（土）～12 日（日）昭和女子大学学園祭での販売
12 月 19 日（火）全体の反省会と発表
2 月 3 日（土）2018 年度・学生によるプレゼンテーション

■反省点

1. 恵那ブランドコンセプトの周知から商品販売へシフトしてしまった。
2. 明治大学では赤字を計上したが、昭和女子大学では大きく利益を出した。
3. 販売方法として恵那の PR の詰め（恵那素材の知識、世田谷素材の知識と融合）が甘かった。
4. 恵那の良さのアウトプットができていなかった。
5. 大学生の強みを生かしてマスコミ関係にもっと PR できた。
6. 学園祭来場者の恵那川上屋ブランドに対する認知度と我々の情報格差を埋める必要を感じた。

■来年に向けて

1. 恵那の情報発信を写真媒体から映像へ進化させる。
2. 恵那市全体を巻き込んでいく。
3. 消費者がキャッチしてくれる効果的なデジタルマーケティングを実施する。
4. JTB、JAL と組み、観光と 6 次産業化を実践する。
5. 学生による情報収集と整理による新たなプレゼンテーションを実施する（学生主体）。
6. 恵那の食文化（五平餅や焼き栗など）を習って実践する。
7. 最低限の利益確保のために、恵那川上屋商品を並行して販売する。

■目的の再構築

1. 世田谷区民に対し、活動の認知度を上げていくことで、10 年後には世田谷の名物とする。
2. 恵那の強みである 6 次産業と観光を行政と協働しながら進めていく。
3. 商品を売る→恵那ブランドを売るにシフトする。

4. 世田谷住民のメリット、大学のメリット、恵那のメリットを最大化する。

■2018 年ビジョン

あらゆる角度から「恵那と世田谷を繋ぐプラットフォーム」をどう作るかを全員共有の課題とする。

■全体の報告

恵那川上屋の強みである「栗」で繋がった 6 次産業事業を、世田谷素材と繋げて将来の観光と地域のつながりを研究し、世田谷ブランドと地方の融合による地域の活性化を狙っていく。現在、恵那川上屋は二子玉川に店舗を持つが、そこでの手配りビラおよび今回協働で開発した 4 種のお菓子の販売を含めて実施し、ほぼ計画通り先行をした。実際に世田谷栗を新植し、さらには栗農園からの仕入れも行った。

JA 世田谷目黒の協力により調査をし、世田谷区における固定資産税の対比を行った。300 坪あたりの宅地で固定資産税が 300 万円／年、農地に転用すると 6000 円／年であり、遺産相続および、将来の世田谷が農地化する可能性があることから、恵那川上屋がこれまで作り上げてきた栗の生産技術を、地主の農地転用の際には活用してくれるよう話し合いをした。

その中で、多くの生産者と出会い、世田谷区にはみかん、葉物野菜、根菜類など多くの生産物があることがわかり、世田谷素材と恵那素材の融合を元に商品開発を行った。1 年目は恵那川上屋が主導して行ったが、来年度は学生のプレゼンテーションからスタートし、我々がサポートに周り、6 次産業と観光を繋げたイノベーションを起こしていく。この研究により地方と都会が繋がった事例が、将来過疎化していく多くの地方で役に立っていくこと、地方創生に都会の住民も協力できる体制作りを理想とする。あらゆる角度から地方と都会を観察し、お互いのブランド構築に必要な繋ぐ場を創造することで「学生による世田谷と恵那を繋ぐプラットフォームの構築」が当面の活動内容となる。

■商品改善

商品は世田谷素材を中心に、学生のアイディアを組み込みながら行った。「栗タルト」は認知度が高く顧客が受け入れやすいところから、また「南瓜のチーズタルト」はイメージが付きやすい商品として、「ケーキサレ」は小松菜のピューレを使うのに、塩味を利かした商品へ、「かぼちゃんトン」は学生のネーミングを生かすために桃山生地と上用饅頭の生地の二種類で和菓子として提供し、南瓜と栗の融合商品とした。反省点としては、上から見る商品ではなくカット面を見せる商品にすることで、中身の見える化による贅沢感や価値を見出すことができたと思われる。また、製造してすぐの瞬間冷凍で品質を維持しようとしたが、冷凍対応のケースが見つからず、紙になってしまったこと、冷凍対応を早めに探し出すことなどがあげられる。また素材もいち早く処理加工し、多くの世田谷素材を発掘していくことで幅やアイテムはさらに広がっていくことで、JA 世田谷目黒様と共同企画で行っていく。

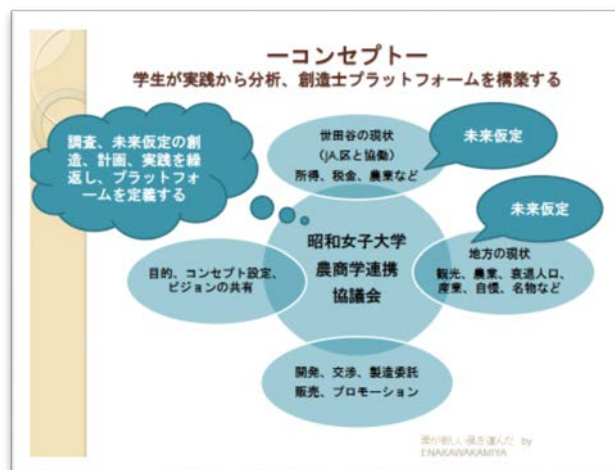
■恵那市について

恵那市長訪問を毎年繰り返していくことで地域でのプロジェクトの認知度は上がっていくようになる。行政側も大学生には協力的で、情報共有や新たなイノベーションを期待している。また、農家の家で宿泊をさせていただいたが、自分でつくった無農薬の野菜をたくさんのメニューとして提供してくださり、この経験は若い農家にとって、新たな恵那川上屋の発見など、機会の創出となり、都会での販売も視野に入れて顧客を掴んでいくことも可能である。明治大学の学生の中に IT に強い人材がいて、その方法を農家が聞き入っていたのが印象的であった。どんな田舎でも良い物をつくりだすが、問題はアウトプットであることを再認識した。また、ヒノキを使った家具を借り、販売台として使ったが、釘を使わない組み立て式の家具で、恵那地方のヒノキを圧縮してつくってあり、品質デザイン共に優れている。これも、いずれ東京での代理店が見つければ、新たな市場が生まれることも見えてきた。おそらくどの地域もがんばっている人は沢山いるので、アウトプットと繋がり一つでふるさと創生を実現できる可能性がある。

■個人の反省

なかなか時間が作れず、また学生とのコミュニケーションがとれないまま、まず実行に移そうとした。逆に今までの経験も活き販売まではこぎつけられた。「まずは探して売ってみる」からスタートし、常に世田谷と恵那をイメージしながら行き来している間に、物売りの先に何か次の目的が生まれるだろうと確信していた。考えていては前には進めず、まずは行動に移してみることはやはり重要であると思う。「社会にいいこと、地域にいいこと、人にいいこと」この 3 つを何らかの方法で見つけ出し、これが事業化できたら、本当に明るい未来も見える。CSV（Creating Shared Value）という価値創造は何かをきっかけにたくさん関係者がそこで価値を交換し、それぞれが持つ強みを生かして発展し、更なる価値を見出すことができると信じている。お互いの利益が享受でき、その先に発展が見える。そんな研究を学生と作り上げていけたら素晴らしいと思う。販売も、継続して初めて世田谷区民の方々に活動や世田谷素材が認知され、その質は数をこなすことで上がっていく。学生は短い時間だが、何らかの気づきや活動の中に、日本のすばらしさや地域の暖かさを感じ、日本の未来を切り開いて行ってくれることを信じている。農業からマーケティング、加工、開発、販売までのサプライチェーンは、このコストを落としながら生産者に還元できる。

東京という市場に大きく入っていくのではなく、世田谷という地域に絞り込み、恵那という地域と繋げることで、情報や要望収集に集中しやすくなり、顧客の意識の高さや情報量の高さを新たな価値として入手しやすくなる。我々が知っていて、顧客が知らないこと、地域で技術を持っても誰も知らないという事実は、情報を共有することで新たなつながりへと発展する。2018 年も更なるプラットフォームづくりを模索していく。



■パブリシティー

9 月 28 日岐阜新聞



11 月 1 日中日新聞



恵那市資料

昭和女子大学現代ビジネス研究所 2017 年度紀要
＜活動報告＞



市役所にて試食会



JA 世田谷目黒飯田会長と生産者と学生



昭和女子大学学園祭販売



ディスプレイ



ポップと学生



明治大学学園祭販売